

書評

光地英学著 『日本の仏舍利塔』

田上太秀

塔の起源は古く釈尊昇代にまで遡ることが出来る。塔はサンスクリットで *stupa* といひ、これを漢訳經典に卒塔婆と音訳されている。もともとは墳墓である。これは時代、種別によって様式は種々である。

たとえば五重や三重に階層を重ねる重層塔、法華經の見宝塔品に説かれた多宝仏の塔に由来する宝塔、僧侶の墓石碑である無縫塔、無縫塔の一種である卵塔、宝篋印陀羅尼を収める宝篋印塔、屋根の四隅と中央にあわせて五相輪を立てそれぞれに五輪を持つ瑜祇塔、地水火風空の五大に象った五個の石を重ねる五輪塔などがある。

仏の髪を供養するために立てた塔髪（塔）、多くの僧侶の遺骨を収納する塔（海会塔）五穀豊穰を祈って粃を収めた塔（粃塔）がある。

仏の遺骨を収めた塔を仏舍利塔という。もともとは舍利容器を土で覆いつくす程度のもので、饅頭のような形をしていたもののようにであったが、儀礼が確立するにつれて鉢を伏せたような形（覆鉢型）になった。これが更に後世になると高層のいわゆるの塔に変身して、こんにちのような塔が出現したのである。

日本では仏舍利の礼拝供養が盛んで、鎌倉時代には個人で小さな舍利塔を造り、室内に安置して信仰する風習が生まれた。とくにそのなかにある舍利容器にはさまざまな装飾を施し、単なる信仰の対象であると同時に、一種の美術品として考えられるようになった。

奈良国立博物館から『仏舍利の荘嚴』という本が出版されたが、このなかには我が国の舍利容器が紹介されており、それらは眼を覆うばかりの華麗さである。まさに美術品である。ここにはそれら舍利容器に施された装飾の美術的価値、美術性の高さ・深さなどについての説明がされており、一種の美術書である。

この『仏舍利の荘嚴』に比肩するすぐれた書が『日本の仏舍利塔』である。前者は舍利容器の芸術性に重点がおかれているのに対して、後者は舍利塔に重点をおいて寺の歴史や寺の景観、また仏舍利の由来などについて説明している。

本書がただ単に仏舍利塔の紹介だけではない理由として言えることは、著者が実際に訪問して自分のカメラのレンズを通して塔を撮影していることであり、またそれぞれの塔の所在地までの道順を丁寧に記述していることである。

北海道、東北、関東、信越、北陸、東海、近畿、中国、四国、九州の十地区を網羅している。

本書の構成はつぎのようになっている。

口絵に御殿場富士仏舍利塔、など六点の写真を紹介している。つぎに「仏舍利および仏舍利塔」と題する論文を掲載する。

仏舍利塔に関する記述の部分は三部から成る。

第一部は「仏舍利塔」と題して、舍利塔が独立して建立されているものに限定して紹介している。

第二部は「仏舍利奉祀伽藍」と題して、寺の伽藍内に、たとえば本堂や五重塔などのいわゆる建物の中に奉祀されている仏舍利塔を紹介する。

第三部は「謹設中の塔など」と題して、伽藍のなかに奉祀する予定で目下建設中の舍利塔を紹介する。

それぞれの仏舍利塔の紹介にあたり、著者は塔にまつわる俗話も紹介する。また寺の境内の風景写真を添えて単なる舍利塔の紹介だけに終わると味気ないものになるのを防ぐ心配りをしている。

著者は多忙な研究の傍らに、この本の執筆に執念を燃やされたのは、発念される二十年前に、郷里の富山県高岡市伏木にある仏舍利塔を参拝したときの感激によるものであるらしい、足で集めた写真集は御苦労のあとが伺えて、著者の深い信仰心とひたむきな研究心に頭の下がる思いである。勝れた労作である。仏教研究者の蔵書の一つとして加えるべきものと推薦する。

〔昭和六十一年十一月二十日発行、五二二頁、吉川弘文館刊行、定価七〇〇円〕